【ポスター発表】

明治期のキリスト教的思想に基づいた女性福祉・家族福祉に関する研究

－萩原鐐太郎の思想と実践を中心に－

○　東京福祉大学　　荻野　基行（5591）

キーワード：組合製糸、キリスト教、一家団欒

１．研 究 目 的

新島襄の影響や蚕糸輸出の際の外国人とのかかわり等により、明治期の群馬県にはキリスト者が多かった。1882（明治 15）年には新島より受洗した湯浅治郎をはじめ多くのキリスト者の尽力により県議会で公娼廃止の建議が可決され、養蚕・製糸業では 1878（明治 11）年に組合製糸碓氷社の前身が湯浅の地元である安中に誕生した。碓氷社は開設当初松下デフレ等により解散の危機に瀕したが、二代目社長萩原鐐太郎（以下、萩原と記す）の就任を機に大きく飛躍する。萩原の運営思想は女性の権利を認め、女性を中心とした一家団欒に主眼をおくものであり、その根底にはキリスト教的思想の影響が多分にあったと考える。

本研究は、我が国における産業組合の先駆けである碓氷社の再生・盛隆期を担った萩原の運営思想や女性労働を中心とした労働観と、キリスト教的思想の関係について研究する。

２．研究の視点および方法

第一に、萩原の思想の変遷と、彼を取巻くキリスト教に関する人的環境について整理する。第二に、萩原の碓氷社運営や労働観と、キリスト教的思想の関係について明らかにする。第三に、萩原が考える女性労働と家族の在り方について考察する。

研究方法は、当時のキリスト教に関する文献や先行研究を参考にしつつ、萩原や碓氷社に関する資料を解釈し分析する。

３．倫理的配慮

本研究は、「一般社団法人日本社会福祉学会研究倫理指針」を遵守する。なお、参考・引用文献の出典については、当日明示する。

４．研 究 結 果

以下に、研究の視点および方法で挙げた 3 つの視点に則り記す。

第一に、萩原は明治に入り福沢諭吉の民主主義思想を取入れ、碓氷社が創設される頃には田口卯吉の『東京経済雑誌』等を読み、自由主義・自由競争の思想的影響を受けた。地域の情勢としては、碓氷社設立の年に湯浅らによって安中教会が設立し、その 8 年後にはその子教会として原市教会が創立した。地理的に両教会と碓氷社は近接しており、碓氷社

創設時の社員の中には新島より受洗した上原春朔や、三代目社長宮口二郎等のキリスト者がいた。また湯浅とは「廃娼運動等を通して相当あったと思われ」、実兄の茂十郎もキリスト教の布教活動に協力していた。また萩原家の蔵書目録には、『新約聖書全』等キリスト教に関する文書名が記されている。晩年の萩原は、キリスト者を中心に行われた禁酒運動にも参加したが、両教会の受洗者名簿に、萩原の名前を見ることはできなかった。

第二に、萩原は社長就任の翌年「幸福を共儒」「社中相互」「一社共同」等という言葉を使い全社員の誠実な奮闘を訴えた。また社員の勤労については「勤倹産を治む」「正直なれ、働け、勤勉なれ」「人のために働け」「苦楽を以て生を為す」等という言葉を残している。

第三に、萩原は女性と家庭の関係について、社長辞任後の講話の中で、次のように述べている。碓氷社の女性は、人に使われるのではなく、「自主的に自分の家庭の繭を自ら製糸する」一家の主婦や娘であり、「一家團欒の中心となって居る人々」でもある。元来一家團欒とは、「人生の楽み中の最上なるものであり、真の快楽は家庭團欒を越したものは無い」のであり、「一家團欒の楽しみを為しつつ製糸をすると云ふのが当社獨特の長所にして實に當社組織の根底である」。そして最後には、「家庭の幸福と製糸上の利益と併せ得るのは恐らく當社の組織を措いては他にあるまいと思ふ」と述べ、他の女工と比較している。

５．考 察

碓氷社創設時の萩原は田口主義を信じ崇めていたが、膨大な借金と松方デフレの影響等により解散の危機に陥った碓氷社を復興させるには、これを放棄し行政への援助を要請せざるを得なくなった。そこで新たな拠り所としたのが、キリスト教ではないかと考える。その理由は碓氷社関係者や身近にキリスト者がいたことや、「共同利益、共同労働といった考え方は、キリスト教的生活共同体思想である」といわれるように、安中・原市教会をはじめ群馬県に多かった組合教会のキリスト教的思想を組合製糸経営に活かせると考えたからではなかろうか。例えば萩原の勤労に対する思想は、キリスト教的禁欲思想や隣人愛に通ずるものであると考える。安中教会憲法第三章「会員の誓約」では、「我儕は博愛の心を養ひ患難相助け窮厄相憐み正義公道に由りて社会風教の改善を計る可し」と謳われている。

当時群馬県ではキリスト者が中心となって廃娼運動が盛んになり、それとともに一夫一婦の倫や女性の解放思想が主張されるようになった。萩原はこれと相まって、女性を一家団欒の中心におくことの重要性を説き、三従の道を非難し、女性の社会的自立の促進を訴えたと考える。また碓氷社の生産システム上女性の労働力は不可欠であったが、萩原は女性を単なる労働力とは見ず、妻でもあり母でもある女性の権利を認め、男尊女卑を非難した。晩年、「夫婦家に居て互に相助け助けられ相親しみ相愛し人間の快楽と幸福とを享くべきが天然の約束」と述べ、それができる労働形態として碓氷社のすばらしさを説いている。

このように萩原は、キリスト教的生活共同体思想を具現化し、女性の権利や福祉の重要性を説き、一家団欒という家族福祉の推奨によって碓氷社を繁栄させたと考える。